

## 横浜史跡見学

# 「ヨコハマライトアップ 近代建築」

県立山北高校 小林 克史

講師 志村 直愛 氏（なおよし）（関東学院大学工学部講師）

行程 横浜公園→横浜地裁判事庁舎→横浜市情報文化センタービル

（→Fカフェで軽食）→三井物産横浜ビル→神奈川県庁本庁舎

→横浜市開港記念会館

この研修では、都市景観 PLANNER & 建築史家である志村先生の解説のもと、地図や資料が駆使され、実体験とあわせて有機的な知識を得ることができた。

まずは関内の歴史から入る。幕末の開港地のひとつである横浜は、貿易港として繁栄し洋館が立ち並び、明治期には鉄道もひかれた。関東大震災と第二次世界大戦の空襲にも耐えたコンクリート建築の傑作が今なお残っている。

また実地体験でしか分からないおもしろさもあった。ひっかき傷のあるスクラッチタイルや、豪華でなめらかな大理石は、実際にさわってみてこそ、というものだった。

建築という遺産の教育的効果についても話がおよんだ。横浜市の補助は雰囲気だけでも残すためなら金を惜しまないようなところが見られるとのこと。ライトアップには、若い人が横浜の建物という歴史的な遺産に目を向けさせたい、そんなねらいもあるという。未来への投資のすばらしさに深く感慨をいたした研修だった。



## 鎌倉史跡見学

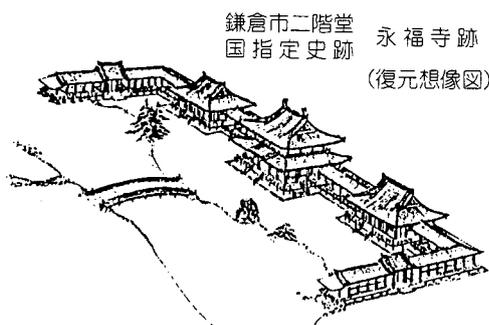
### 「鎌倉時代の興亡を歩く」

### 「最新の発掘調査をもとに」

史跡踏査委員会 高木学園女子高校 三 橋 景 子

八月一日（水）、玉林美男氏（鎌倉市教育委員会文化財課）を講師に迎え、神奈川県外（東北〜九州）の四六名の参加を得て、寿福寺から踏査を始めた。寺は頼朝死没の翌年北条政子が栄西を招いて創建された。仏堂内の本尊釈迦三尊像（俗称籠釈迦）、仁王像の説明を聞く。踏切を渡り扇谷上杉氏屋敷跡を通って、浄光明寺の山門（英勝寺の寛永創建時の建物）へ。浄光明寺（古義真言宗）は鎌倉執権第六代北条長時が開基で北条氏の菩提寺である。足利尊氏が中先代の乱後、この寺に蟄居し寺領の寄進をした。収蔵庫に置かれている本尊の木造阿弥陀三尊像（衣部に鎌倉独特の土紋装飾が残る）は、優しく柔らかな表情をたたえていた。阿弥陀堂東側の崖面の「やぐら」の中に大伴神主家（鶴岡八幡宮七百年間にわたる神職）の墓所がある。阿弥陀堂上段平地の周囲の崖の「やぐら」群の供養の中心と考えられる「綱引地藏やぐら」は、納骨と仏殿的機能を持ち、玄室中央には背面に銘が刻まれた等身の地藏菩薩座像（安山岩製）が安置されている。やぐら上の山頂に、藤原定家の孫を父とし、母は阿仏尼である冷泉為相墓がある。鎌倉の多くの寺は、山を削り堂宇を建築しており、背後は切り立った崖になっている。その土木工事に多くの僧侶が関わり、崩した土や岩で谷を埋め平地にして町づくりをした点が、奈良や京都と大きく異なるとの説明があった。

鶴岡八幡宮は、発掘調査で多くの遺構・遺物が確認され、往時の境内の様子がわかってきた。若宮大路の幅は平安京朱雀大路の半分の一四丈（四二・四二m）、大路の端は溝があり板塀で区画されていた。北条執権屋敷跡に建立した宝戒寺を通り、東勝寺跡へ。一三三三（元弘三）年五月二二日、執権屋敷背後の東勝寺（葛西ヶ谷の最奥部を雛段状に切り拓き建立）で、北条高時ら総勢八七四人が自害し寺は炎上した。発掘調査で建物跡や火災の跡らしい炭化層が確認されている。現清泉小学校の大蔵幕府（源頼朝邸）跡を経て、山の中腹にある法華堂跡（源頼朝墓）の急な階段を登る。幕府北方の頼朝の持仏堂を、彼の死後墳墓堂としての法華堂に改めた。層塔形の頼朝墓（安永一七七二〜八〇年ころ薩摩藩主島津重豪が建立）のある平地に、西向きに造られていたことが近年の発掘調査でわかった。東御門奥の発掘調査を急遽見学し、幕府の鬼門守護神の荏柄天神社（菅原道真を祀る）や、鎌倉宮（大塔宮護良親王を祀る）を経て、最終見学地の永福寺跡に到着。永福寺は、平泉を参考に合戦で亡くなった将兵鎮魂のため源頼朝が建立、一五世紀中頃廃絶した。風水思想により開けた南側に金沢六浦港〜幕府への二階堂大路が通っていた。数次に渡る発掘調査で、二階大堂の南に阿弥陀堂、北に薬師堂、両脇堂から池に向かった翼廊、堂前の苑池の架橋などが確認された。今は空き地で草が生い茂っているが、国指定史跡として整備予定との説明があり、ここで解散した。



## 横浜史跡見学

### 「バスで巡る横浜く中世と近代に栄えた 二つの港を訪ねて」

県立田奈高校 岩 崎 孝 和

史跡見学Bコースは、九時三〇分桜木町駅前のホテル前に集合。参加人数に合わせて小型バスに、全歴研飯田会長はじめ高知や大阪など各地からあわせて計二三名が参加した。

まず桜木町駅前へ本町通りへ。「みなと横浜」のシンボル横浜港大棧橋埠頭の国際客船ターミナルの展望台へ。案内役の木村芳幸先生（横須賀工業高）の説明で、開港当時の波止場の名残を留める「象の鼻」突堤、赤煉瓦倉庫、その南にある横浜税関ビル（塔の形から愛称クイーン）、その東の山下公園・客船氷川丸、巨大なガントリークレーンが林立する本牧埠頭等を眺望した（折から大棧橋には豪華客船飛鳥が入港し、太平洋航路客船全盛時代を彷彿させた）。

次に、神奈川県庁本庁（塔の形から愛称キング）、赤い煉瓦の外壁が印象的な横浜市開港記念会館（塔の形から愛称ジャック）、建物の低層部が旧生糸検査所の外観が復元され軒の部分に繭や桑など養蚕業をシンボルするレリーフを飾っている横浜第二合同庁舎など、横浜の近代を代表する建物を観ながら、神奈川県立歴史博物館へ到着。事前に学芸員の橋本健一郎氏に解説をお願いしていたにもかかわらず、急遽博物館側の都合で本物の浮世絵を見ながらの解説が不可となってしまった。この点については非常に不満が残るところで、後日分科会でも大いに議論された。仕方なく特別展の「最後

の浮世絵師」と言われた小林清親の「東京名所絵」などの展示を見学して同館を出発した。

ついで外人居留地だった横浜山手地区に向かう。西洋風の建物が町並みをつくりエキゾチックな情緒が感じられるところである。港の見える丘公園のイギリス館などを洋風建築を外観し、徒歩で外人墓地に沿って元町に出て昼食となった。

昼食後、バスは、県立金沢文庫・称名寺に向かった。ここから案内役は坂井久能先生（神奈川県総合高校）に交代。金沢の地は鎌倉と隣接し鎌倉幕府との関係が深く、称名寺など歴史的建造物が残っている。県立金沢文庫では、学芸員稲木俊雄氏・向坂卓也氏の説明を受け、館内を見学。同館には、称名寺や金沢文庫に伝来した文化財が所蔵されている。称名寺は、北条実時が金沢の別邸に建てた持仏堂が始まりとされる。同寺では、国指定重要文化財で一二七六（建治二）年三月三〇日の胎内銘がある木造弥勒菩薩立像を特別見学することができた。往時の隆盛を思わせる仏像であった。

午後四時半ごろ同寺を出て、京急金沢文庫駅で解散となった。

企画及び運営は歴史分科会出版委員会があたった。メンバーは、上記の木村・坂井の他、岩崎孝和（田奈高校）・佐藤雅信（港南台高校）・古川寛紀（上郷高校）・西沢均（市が尾高校）

